資料２

第４９回　滝川市環境市民委員会　タイムテーブル

時　間	会　議　内　容	備　考
16：30	１　開　会	
16：30～16：40	２　報告事項（１）評価報告及び提言書	
16：40～18：25	３　協議事項（１） 「第二次滝川市環境基本計画」 ワークショップ ・前回ワークショップの振り返り 16：40～16：50 ・グループ協議 協議時間の目安 Ａｸﾞﾙｰﾌﾟ　Ｂｸﾞﾙｰﾌﾟ 16：50～17：30　地球環境　自然環境 （５分休憩） 17：35～18：15　生活環境　環境ｺﾐｭﾆﾃｨ 模造紙にまとめる 事務局は２名づつ、グループに入る ＊Ａグループ　横山、大橋 ＊Ｂグループ　半井、金子 ・ワークショップグループ発表 18：15～18：25	
18：25～18：30	４　その他	
18：30	５　閉　会	

今回の検討プロセス

１.振り返り
・前回までの内容の確認（前回の模造紙）

２.確認・追加・修正
・事務局で整理したワークショップの内容を確認し、追加修正を行う

①現状・課題
②あるべき姿・めざす姿
③手法・施策

３.まとめ
・各分野の目標設定
・まとめた内容を基に目標を定める

①地球環境の目標
②生活環境の目標
③自然環境の目標
④環境コミュニティの目標

今回まとめた内容を

環境基本計画へ反映

Aグループ
地球環境

現状・課題（整理・集約したもの）	あるべき姿・めざす姿（整理・集約したもの）	手法・施策（整理・集約したもの）	「地球環境」の目標
自然エネルギーの活用 ①雪が多い ②川が多い ③太陽光は、ある程度広まっている それ以外のエネルギーの活用 ④主要産業の農業で出る稲わらの利用	①自然エネルギーの利用増やす ②自然エネルギーの利用により、温暖化を防ぐ意識が高まること ③エネルギーの地産地消は、地元経済に還元される	①雪の低温保存や冷房などへ利用 ②バイオマスや小水力、風力などの自然エネルギーの活用 ③稲わらの有効活用 ④各所管課と情報交換、連携	「地球環境を身近に感じられるまち」 ・自然エネルギーの活用など地球環境を知ることが身近にない ・施設をいろいろな人に知ってもらえるよう情報発信すること ・災害についても気象などの環境の情報を発信していくこと
気候変動・災害 ①温暖化が原因と思われる災害、異常気象が近年増えている ②災害が起きた時、具体的にどんなリスクがあるのかわらない ③災害に対する普段からの意識付けが必要	①災害時に動ける市民、コミュニティの形成 ②災害被害の少ないまちづくりが生活を守るだけではな自然環境保全になる ③異常気象の原因と考えられる温室効果ガスを減らすこで災害が減る （追加内容） ①被害の少ないまちづくり ②異常気象などの知識を得るための場を増やす ③地域ごとで異常気象に対する防災対策ややり方が違う ④温暖化のことを詳しく知るべきではないか	①災害によるリスクの洗い出しが必要 ②防災知識を皆が共有すること。 ③災害時にどう行動するか知識を取り入れて勉強会などを行う ④水害について、東日本大震災など過去の災害を教訓にする ⑤防災担当課との連携強化が必要	
地球環境を知る ①地球環境に関する情報が少ない、わからない ②省エネモニターや環境調査などのPRや参加が足りない ③限られた場でしか情報が得られない ④情報の発信と連携が必要	①自然と触れ合う機会を充実することにより環境を体感する （追加内容） ①CO2削減量18%に対し、職場で取り組んでいるが広がりがないのでもっと周知され取組が増えればよいのではないか ②環境に関する情報が行政待ちなので、情報がすぐわかるようになればよい ③環境に関する情報、窓口が少ない。ガイド、拠点があると便利 ④情報が1か所で分かるようになればよい	①ゲームを通じてわかりやすく伝える（消費者まつりなど） ②行政だけでなく民間団体などで行い、環境を学ぶ機会を増やす ③子どもたちが自然の中で遊べる環境づくりが必要	

Aグループ
生活環境

現状・課題	あるべき姿・めざす姿	手法・施策（整理・集約したもの）	「生活環境」の目標
エコライフスタイル ①リサイクルフェアは人気がある ②使えるものもごみとして出している ③無駄なものを買いすぎる ④24時間、深夜営業などが増えている（消費型社会）	①健康で環境にやさしい生活を送ること ②エコを意識しながら生活するライフスタイルの実践 ③リサイクルの意識向上	①エコ実践のために幼児期からの意識づけ ②リサイクルフェアなど3Rの積極的な活用 ③食用油回収などリサイクル事業継続 ④早寝早起き、夜型生活の見直しなど日常生活の見直しからエコを考える ⑤省エネ機器やLEDの導入の推進	「ごみにしない仕組とライフスタイルが実践されるまち」 ・健康で環境にやさしい生活を送ること ・エコスタイルの実践としてリサイクルの推進 ・ごみの減量化など処理にかかる経費をわかりやすく市民にみえるようにすること ・ライフスタイルの見直しの機会が啓発の機会であり、増やしていくこと ・数値目標を設定することでライフスタイルの見直しを実感できる ・ごみ問題で重視することは出さないこと ・ごみの減量化の取組は継続する
ごみ対策 ①地域のごみを拾う時にボランティア袋がもらえることは評価できる ②町内会のごみ回収、ごみ拾いは良いこと ③ごみ箱がなくなってきた ④公園や駐車場などでポイ捨てされたごみがある ⑤店の過剰包装でごみが増え、不法投棄につながるのではないか ⑥燃えるごみのエネルギー実績がわかるようになった	①ごみの減量化 ②ごみ分別により資源になることを感じること ③自分の出したごみに責任を持つこと ④日常生活の中でごみを出さないようにする生活、取組を市民、事業者で実践する ⑤ごみ処理にかかる経費の公表化	①ボランティア袋の継続 ②町内会の資源回収告知の強化（地区） ③クリーンデイ春・秋継続 ④個人負担の少ないごみ回収の検討 ⑤買い物袋や過剰包装を減らす ⑥使い捨て容器を使わないようにする→ごみの減量化、何度でも使えるものの利用 ⑦必要ないもの、今すぐ使わないものは買わない ⑧ごみからのエネルギーを取り出していることをPR（データ化、公表） ⑨ごみをお金に換算することでごみの減量に関するコスト意識が出てくる	
公害 ①車の騒音、排気ガス ②車のエネルギーの活用検討	①エコドライブに皆が取り組む	①エコドライブ講習の実施と推進 ②車の通行時の振動などの利用	

Bグループ
自然環境

現状・課題	あるべき姿・めざす姿	手法・施策（整理・集約したもの）	「自然環境」の目標
森林 ①市街地と緑が分離しているようで緑を身近に感じられない ②身近な緑として、公園の樹木や街路樹があり、それらは街に潤いを与える反面、維持管理が必要 ③樹木には様々な役割があるが、それらについて、意外と知られていない ④民間で植樹の取り組みも行っている ⑤市街地と緑が分離しているようで緑を身近に感じられない	①樹木の適切な管理 ②街なかの身近な緑の維持 ③樹木の持つ能力を理解し、その素晴らしさ、役割を学び、啓発する	①落ち葉対策を考える ②定期的に公園の樹木などを見てもらい、適度の剪定、伐採などのメンテナンスを行うこと ③森を守る専門家の意見を聞く ④イベントなど楽しみながらごみ拾いや落ち葉ひろいをする ⑤樹木の効用を広報や団体活動などでPRする	「育てる」「五感を使った体験」「身近な自然」 ・森林や川が身近にあるのに理解されていない ・農業体験の受け入れができていない ・たきかわの農産物が充分に認識されていない ・樹木の維持管理など木を学ぶことが大事 ・川についても同様に川の活動など情報を伝えることが必 ・発信していくことが必要なのではないか ・日常生活に溶け込む身の回りのちょっとした自然を理解してもらう ・身近な体験環境を整える ・自然環境を考える機会を増やす
川 ①滝川において「川」は魅力であり、シンボルでもあるが成り立ちや歴史などを理解している人は少ない ②川はまちの特色のひとつであるが、身近な存在ではなくなった	①川をはじめ自然の成り立ち、街の成り立ちを学び、川の魅力、活用を考える ②自然を活用した体験を通じて生きる力を身に付ける	①川、森を大切にし、それにより農業が発展していくつながりを学ぶ ②来年のエコ部の取り組み ③川をはじめ、自然に関する危険を体験を通じて学ぶ ④子どもからの学習を地道に息長く続けること ⑤安心して遊ばせる場所を作ること、探すこと ⑥川がなぜ危険なのかを考える	
農業 ①農業体験を通じて、子どもたちをはじめ、農業や農産物に対する関心を高めていきたいが、受け入れ先の減少などの課題が多い ②優れた農産物、菜の花をはじめとした美しい農業景観はあるが、十分に認識されていない	①農業体験を通じて、農業の大切さ、食を学ぶ ②優れた農産物や景観を探りその魅力や役割を伝えること	①子どもたちが生産者の話を聞く機会を充実させる ②インターネットなど、現在のトレンドに沿ったPR	

Bグループ
環境コミュニティ

現状・課題	あるべき姿・めざす姿	手法・施策（整理・集約したもの）	「環境コミュニティ」の目標
環境教育 ①市内には環境や自然に関する知識や技術を持つ人がおり、施設も充実しているが活動などに有意義に活用されていない ②子どもたちが知識を習得する機会や選択肢は豊富になったが体験する機会が少なくなっている ③子どもの環境教育ができる指導者が少ない	①市内の人材・素材を活用し、故郷の環境、自然を学び郷土を大切にする育成 ②滝川の自然や環境を生かし子どもたちが生きる力を身に付けて次世代に伝える ③環境教育ができる人材を増やす	①保護者が集まる機会に学習会を開催 ②環境教育を実現するためには、専門家の配置が必要 ③人材バンクの活用手段の機会を増やす ④それぞれの年代に合わせたカリキュラムを作る	「育てる」「継続可能性」「維持」 ・環境教育に十分な時間が取れていない ・食育は便利で豊かになりすぎて食のありがたみが薄く ・情報発信が大事 ・環境リーダーを増やして活用すること ・環境リーダーを育てること ・少しづつすすめていくことで見直されていくのではないか ・市内の人材・素材を活用し、故郷の環境、自然を学び郷土を大切にする育成
食育 ①コンビニやスーパー、外食産業が充実することにより食事は充実したが、食事の意義や役割など食についての知識や知恵は乏しくなった	①専門家、生産者から食べる大切さ、楽しさを学び故郷の自然や農業に目を向ける	①子どもから大人まで対象とした食育が必要 ②食育の専門家などを登録し、講師として招く ③興味を持ちやすいテーマで栄養士など専門家の講演会の開催 ④リーダー的な集まりを作り、小さな集団から横に広げる ⑤活動を横につなげていき、少しずつ知識を深めていく ⑥環境に関する豆知識や健康レシピなどを、学校の廊下に掲示する．それを継続して知識を深めてもらう ⑦滝川の食材を活用したレシピを紹介	